

木製雑貨

静岡の木製雑貨は、江戸時代の漆器から派生したもので、明治時代末から大正時代にかけて、静岡が輸出漆器の有数の産地になるにつれて、木製品の製造の技術・ノウハウが蓄積されたことによって発展しました。

戦後米軍の兵隊用土産として、富士山、五重塔などの山水蒔絵を施したオルゴール付き宝石箱が好まれ、アメリカ、ヨーロッパなどに大量に輸出され産地として大きく発展しました。その他にも、スパイスセット（調味料、薬味入れ）、キャニスター（お茶、コーヒーなどを入れて保存する箱）、サービストレーなどの食卓、台所用品も盛んに製造・輸出され一大木製品産地となり、昭和41年(1966)8月11日に「静岡県輸出雑貨協同組合」が設立されました。

昭和40年代後半のドル・オイルショックまでは、小さい木製品の輸出全盛期で、各メーカーは輸出貢献企業として国から表彰を受けたこともありました。

昭和60年代に入り円が強くなるにつれて輸出競争力に陰りが見られたため、業界ではいち早く国内市場をターゲットに定めて、ソーイングボックス、小引出し、ミニ家具類等のインテリア用品開発を行い、高度成長の波に乗って発展しました。